

令和7年度 学校保健統計健康状態調査

調査結果の概要

- ・むし歯（う歯）被患率は、年々減少傾向で過去最低となっている。DMFT は中学校が昨年度よりも減少し、高等学校が増加している。
- ・視力については、学年が上がるにつれて視力 1.0 未満の児童生徒が多くなる。
- ・食物アレルギーを有する者の割合は、全ての校種において増加傾向である。
- ・ぜん息の被患率は、全ての校種において増加傾向であるが、全国平均と比較すると低い。

1 調査の目的

児童及び生徒（以下「児童等」という）の発育及び健康状態を明らかにすることを目的とする。
学校保健安全法施行規則により実施される健康診断の結果に基づき、健康状態調査を実施する。

2 調査の対象

本調査の対象者は、文部科学省の学校保健統計に準ずるものとする。
岐阜県公立小学校、中学校、義務教育学校、高等学校に在籍する満 6 歳から 17 歳までの児童生徒全員を対象とする。

校 種	学校総数 (校)	在学者数 (人)	参加校数 (校)	対象者数 (人)
小学校	343	91,737	343	91,603
中学校	176	50,465	176	50,403
高等学校	66	37,568	66	36,948
総数	585	179,770	585	178,952

※義務教育学校は、前期課程は小学校、後期課程は中学校のデータを含む。（以下同じ）
※幼稚園のデータは、学校保健会に加入し調査協力を得られる園が年々減少しており、当該年齢児の 10%未満のデータしか集計できないため、令和2年度から調査対象としない。

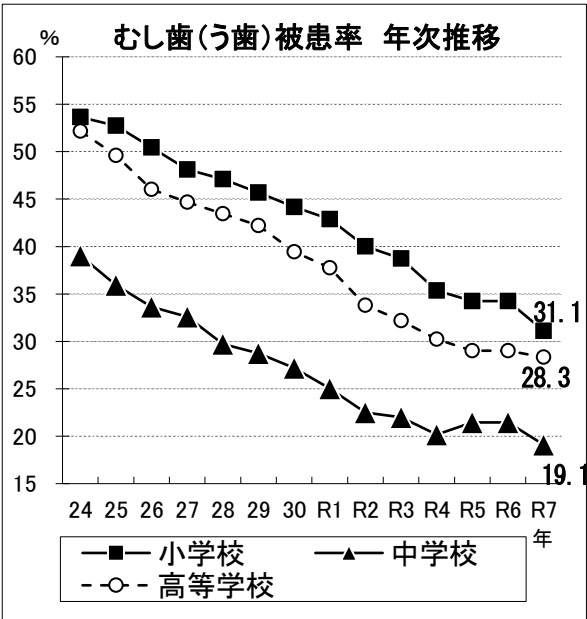
3 調査項目

本調査の項目は、文部科学省の学校保健統計調査項目に準ずるものとする。本県独自の項目として「食物アレルギー」「1 型糖尿病」「2 型糖尿病」「腎性糖尿」「学校生活管理指導表（アレルギー疾患用）の活用者数」を追加している。
なお、全国平均は令和 6 年度学校保健統計調査結果（令和 7 年 2 月公表）を採用した。

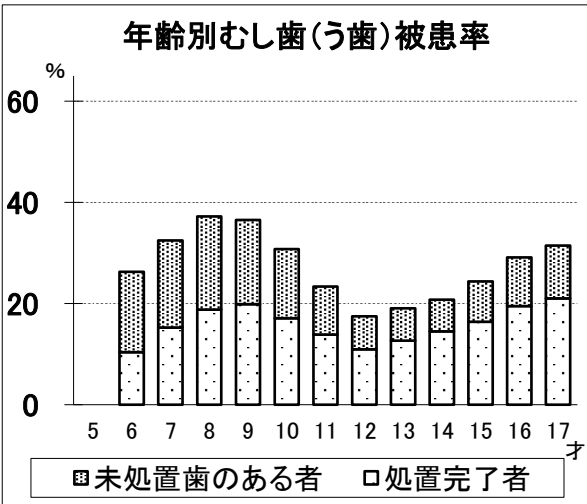
4 結果と考察

(1) むし歯（う歯）

むし歯被患率は、小学校で 31.11%、中学校で 19.11%、高等学校 28.32% となり、小学校は昨年度より減少した。年々減少傾向にあり、全国平均（小：32.89%、中：26.50%、高：34.70%）よりも好結果である。



むし歯被患者の内、未処置歯のある者は、7～8 歳に多く、その後は減少するが、14 歳から増加に転じている。むし歯被患率が 11～12 歳において割合が減少するのは、乳歯の生え変わりが考えられる。したがって、13 歳以降の永久歯のむし歯を増加させないよう、家庭と連携を図りながら、幼少期から小学校だけでなく、中学校や高等学校でも指導及び啓発が必要である。



DMF T指数は、昨年度と比較すると中学1年生（12歳）は0.21本減少したが、高等学校1年生（15歳）は、0.25本増加した。全国平均と比較すると良い結果となった。

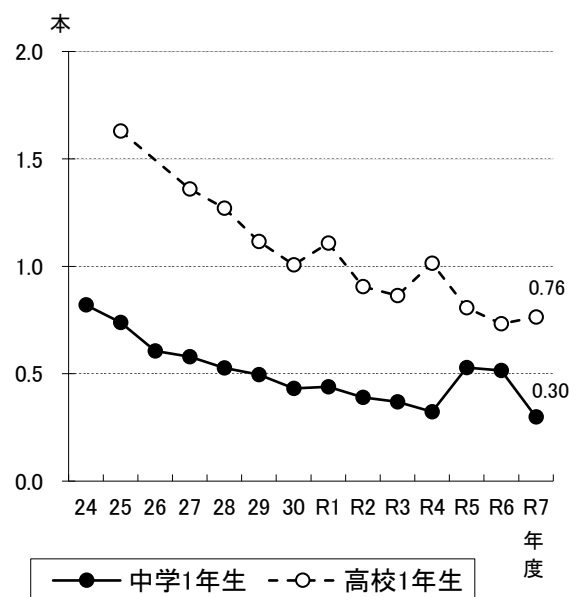
DMF T指数（一人当たりの永久歯のむし歯等数）

D：永久歯のむし歯で未処置の歯

M：永久歯のむし歯が原因で失った歯

F：永久歯のむし歯で処置を完了した歯

DMFT指数年次推移(中学1年生と高校1年生)

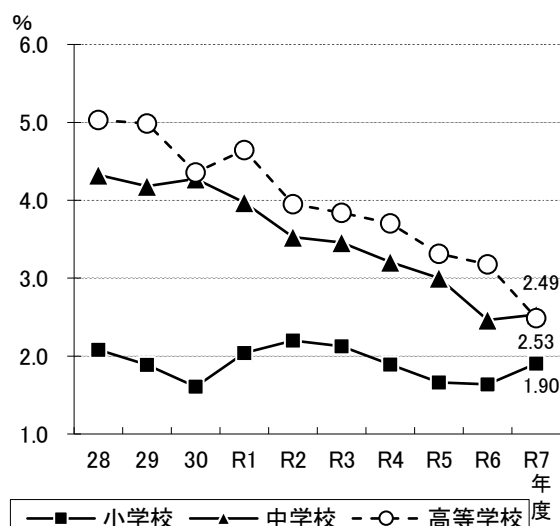


(2) 歯肉の状態

歯肉の状態：歯肉に炎症があり、歯肉の状態が「2」（専門医による診断が必要）と判定された者

歯肉の状態を昨年度と比較すると、高等学校は減少しているが、小学校と中学校においては増加した。

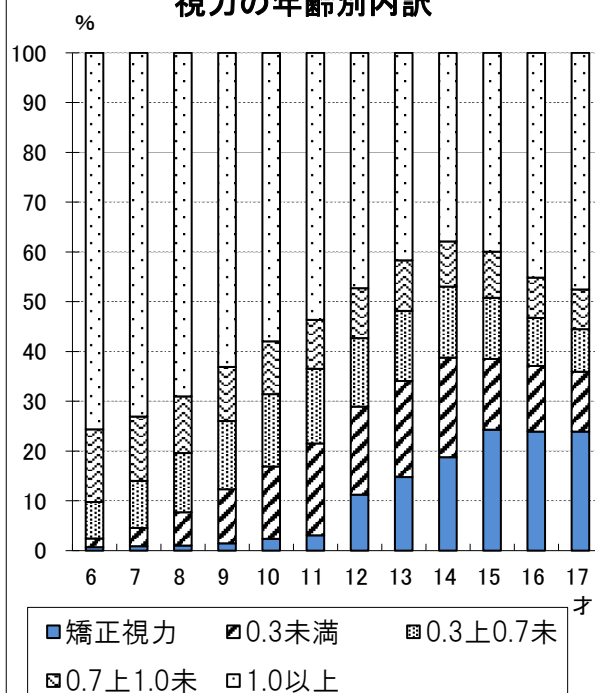
歯肉の状態 年次推移



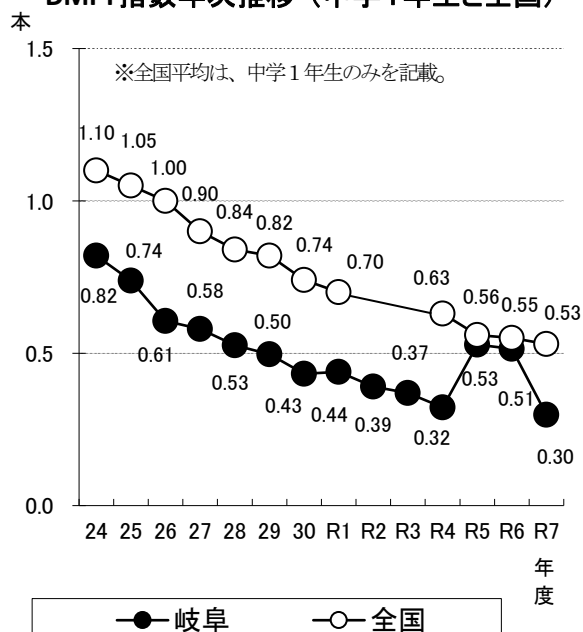
(3) 裸眼視力

年齢が進むにつれて、裸眼視力 1.0 未満の者の割合（矯正視力を含む）は、増加している。

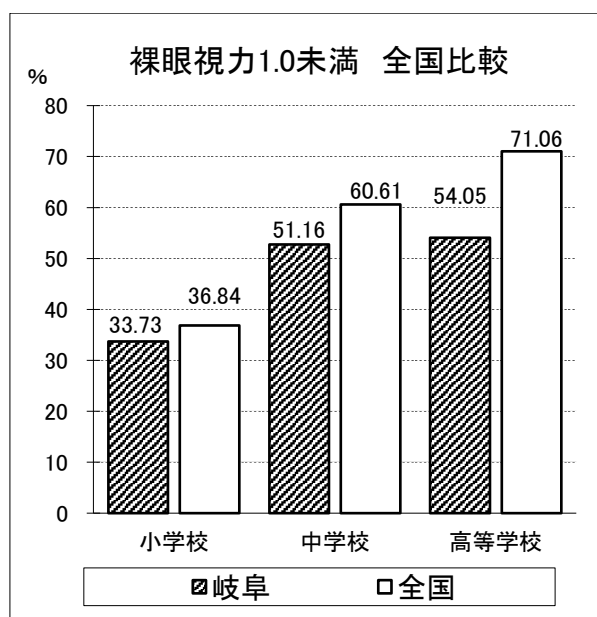
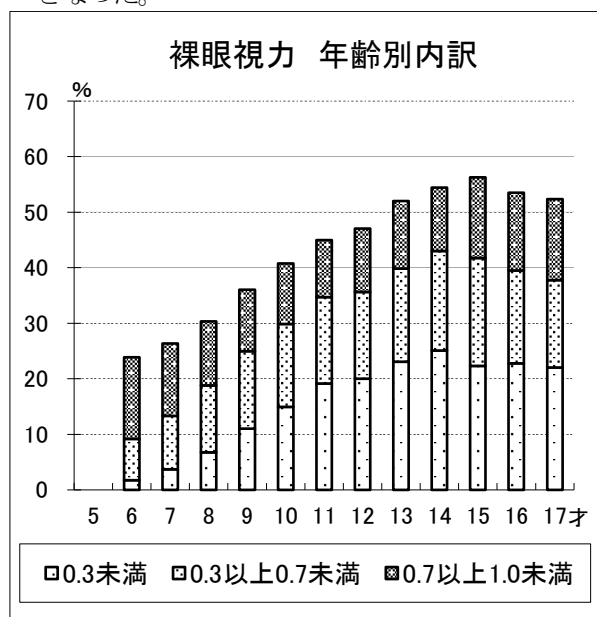
視力の年齢別内訳



DMFT指数年次推移（中学1年生と全国）



裸眼視力年齢別では 1.0 未満の者が 15 歳で最も多い値となった。全国平均と比べると小学校・中学校・高等学校の全ての校種において低い結果となった。

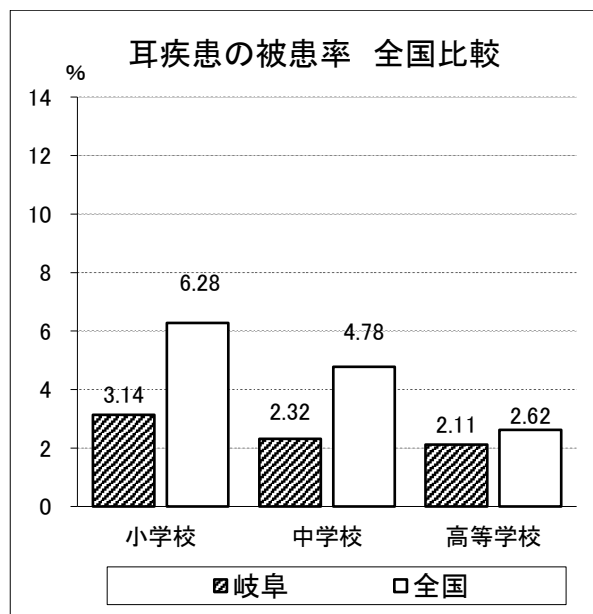


(4) 耳疾患、鼻・副鼻腔疾患

耳疾患：急性・慢性中耳炎、内耳炎、外耳炎、メニエール病、耳垢栓塞等の疾患・異常と判定された者

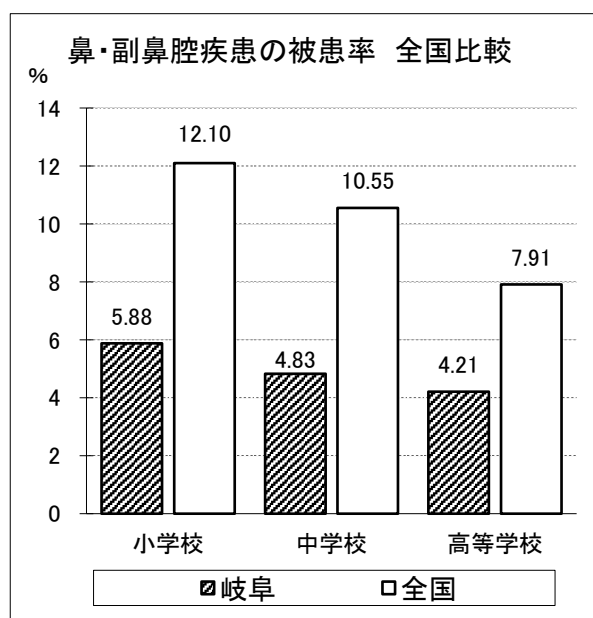
校種別では、例年のように小学校の疾患率が高かった。

全国平均と比較するとどの校種においても大幅に低い値となった。特に、小学校、中学校においては、半数程度の値となった。



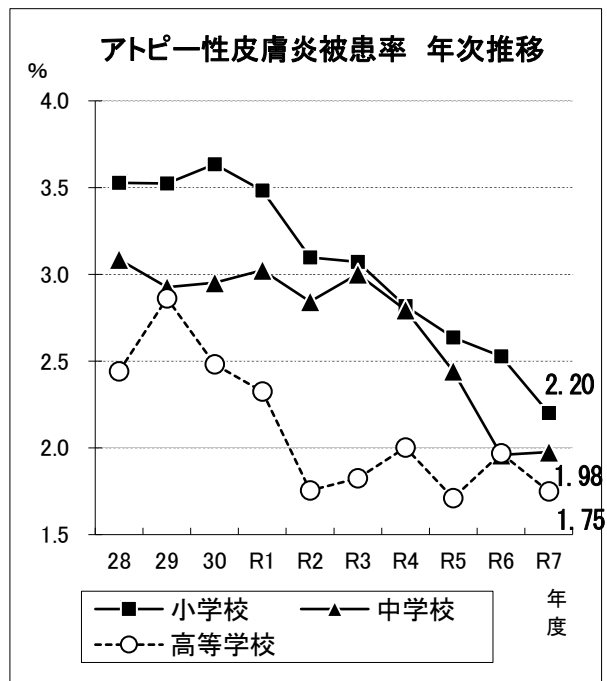
鼻・副鼻腔疾患：慢性副鼻腔炎、慢性鼻炎、鼻ポリープ、鼻中隔彎曲、アレルギー性鼻炎の疾患・異常と判定された者

全国平均と比較するとどの校種においても大幅に低い値となった。校種別では、高等学校の疾患率が低かった。



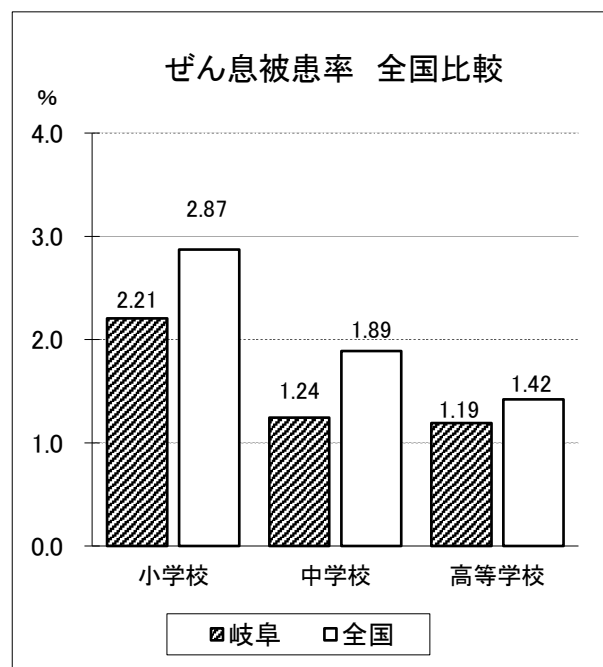
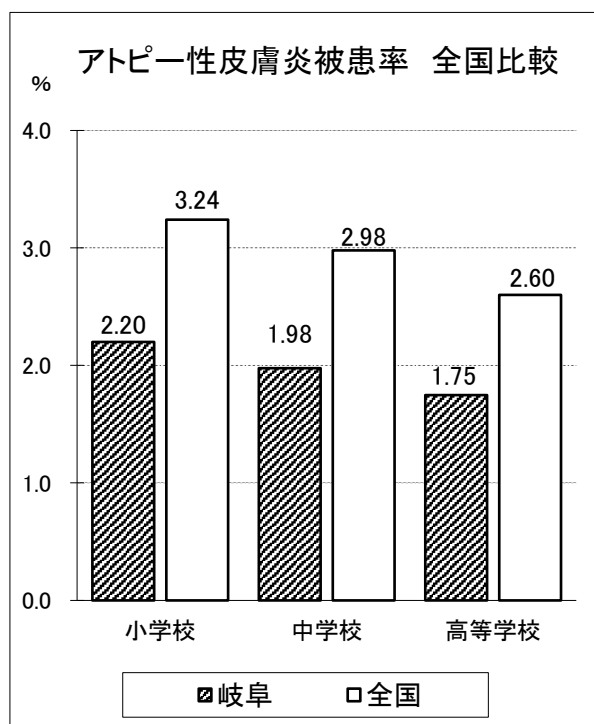
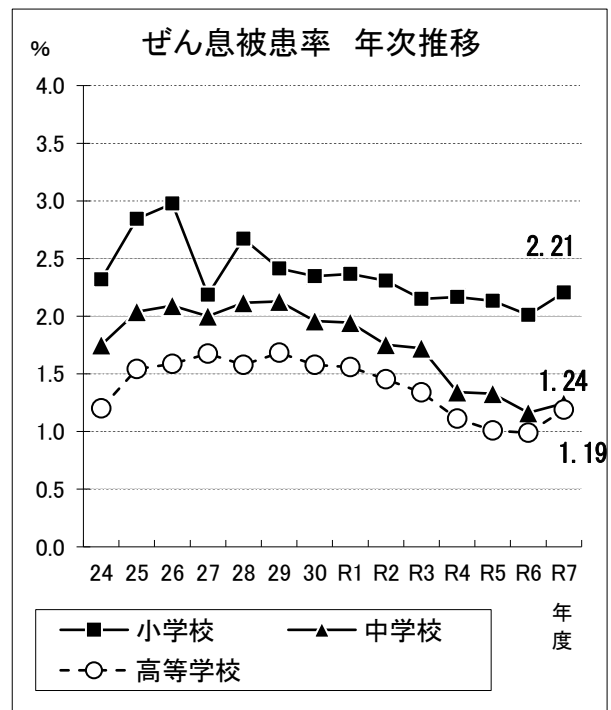
(5) アトピー性皮膚炎

小学校・中学校・高等学校の被患率が顕著に低下してきた。全国平均も下回った。



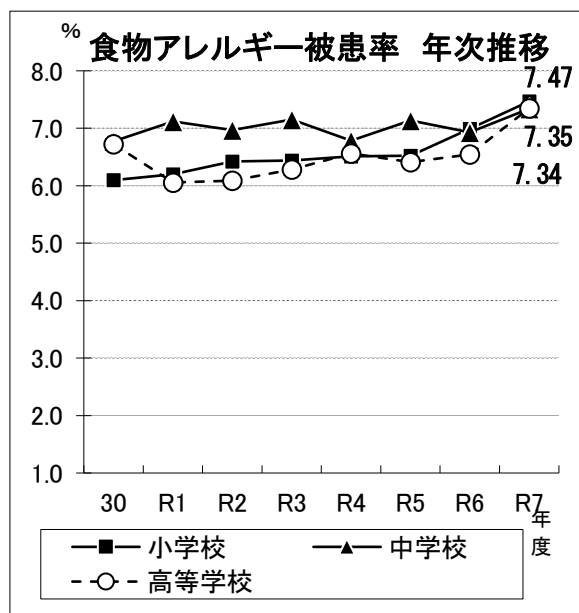
(6) ぜん息

今年度は、小学校・中学校・高等学校において、被患率が増加傾向にあったが、全国平均よりも下回った。

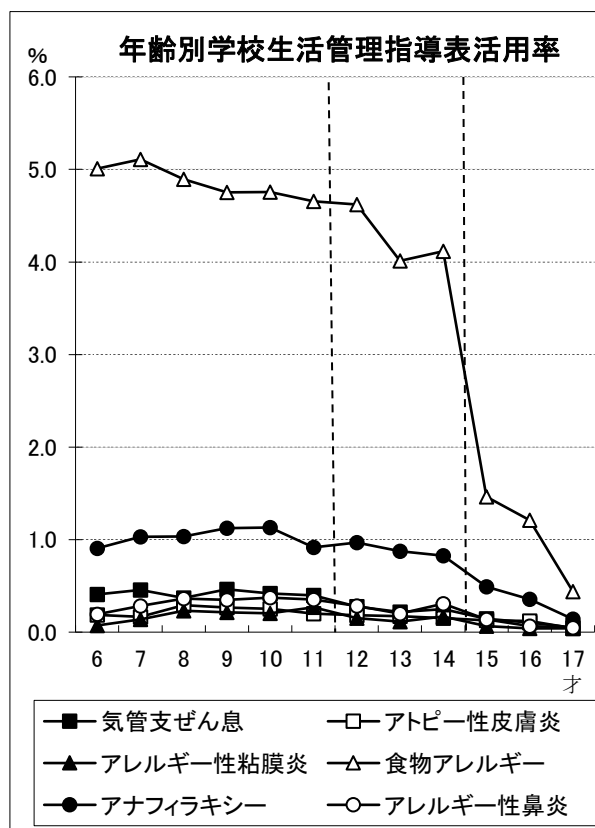


(7) 食物アレルギー

食物アレルギー：入学時、または健康診断前の保健調査等で食物アレルギーと確認された者



食物アレルギー被患率は、増加傾向である。学校種別では、小学校 7.47%・中学校 7.34%・高等学校 7.35%と被患率に大きな差がなかった。



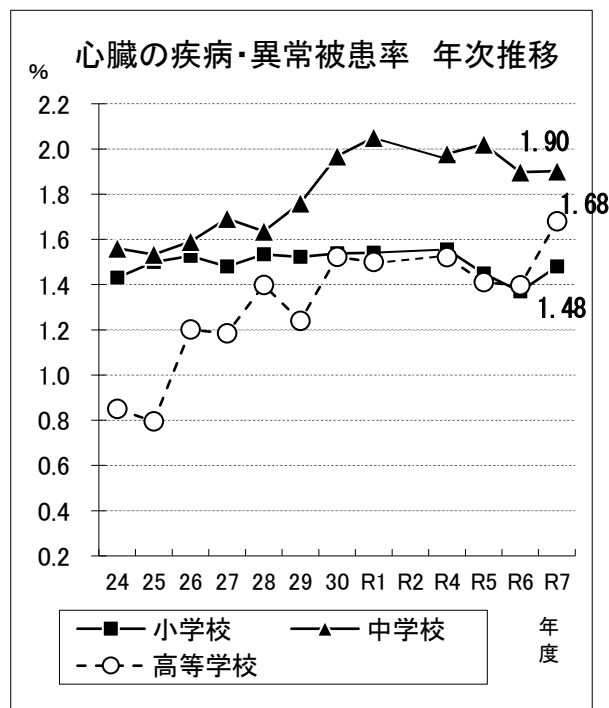
学校生活管理指導表活用率は、「食物アレルギー」が、他のアレルギー疾患に比べて高い。しかし、高等学校での活用率はかなり低く、給食が実施されないことが影響していると考えられる。

全体的に年齢が上がるにつれ、活用率が低下しているが、症状が改善し、管理不要になる事例も一定数ある。

(8) 心臓疾患・心電図異常

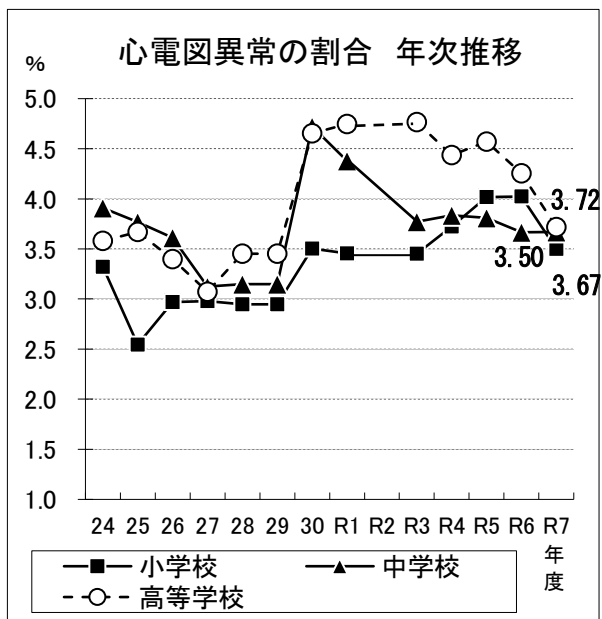
心臓疾患：心膜炎、心包炎、心内膜炎、弁膜症、狭心症、心臓肥大、その他の心臓の疾病・異常の者（心音不順、心雑音及び心電図異常のみの者は含まない。）

心臓の疾病・異常被患率は、小学校・高等学校においては、増加傾向にあり校種により差異がみられる。



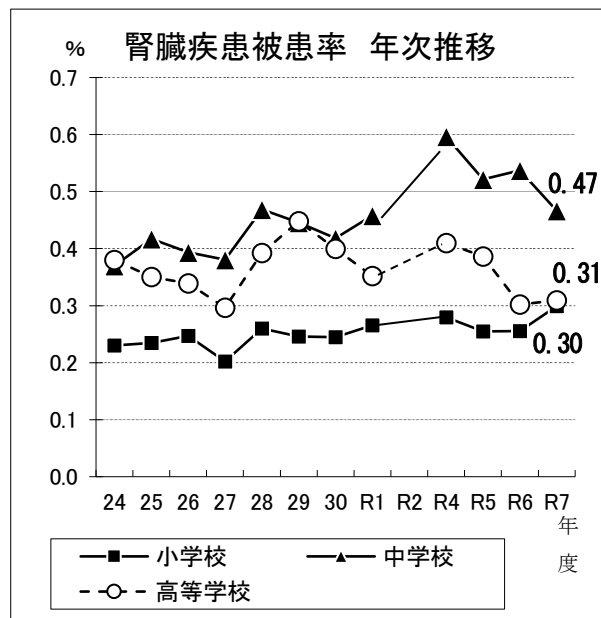
心電図異常：心電図検査の結果、異常と判定された者
ここでいう異常とは医師が心電図所見を見て異常と判断した者を指す（一次検診）

心電図異常の割合は、小学校 1 年生・中学校 1 年生・高等学校 1 年生で、昨年度より被患率が低かった。



腎臓疾患：急性及び慢性腎炎、ネフローゼと判定された者

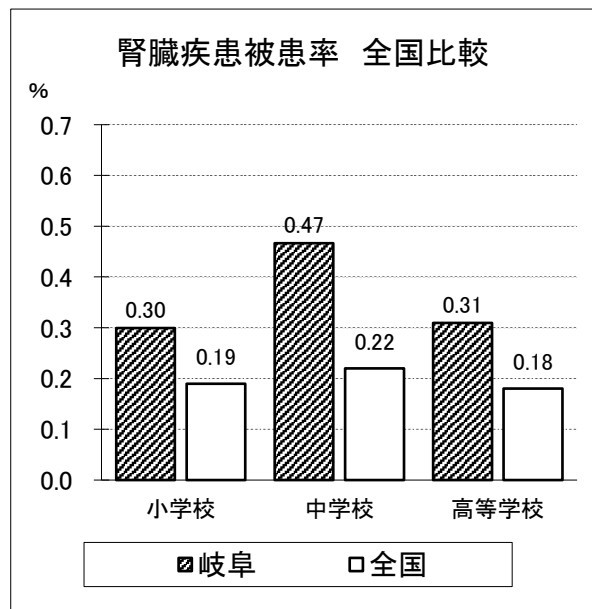
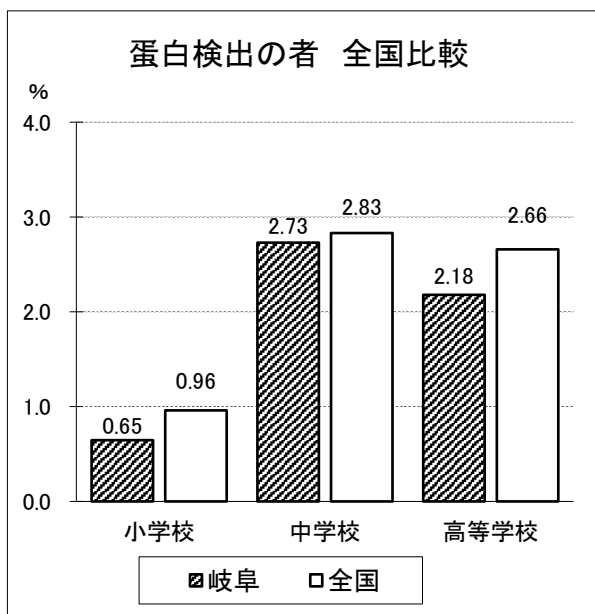
腎臓疾患被患率は、中学校においては減少傾向であるが、小学校で増加、高等学校においては微増であった。



(9) 腎臓疾患

尿蛋白検出者：第一次検査の結果、尿中に蛋白が検出（陽性または疑陽性と判定）された者

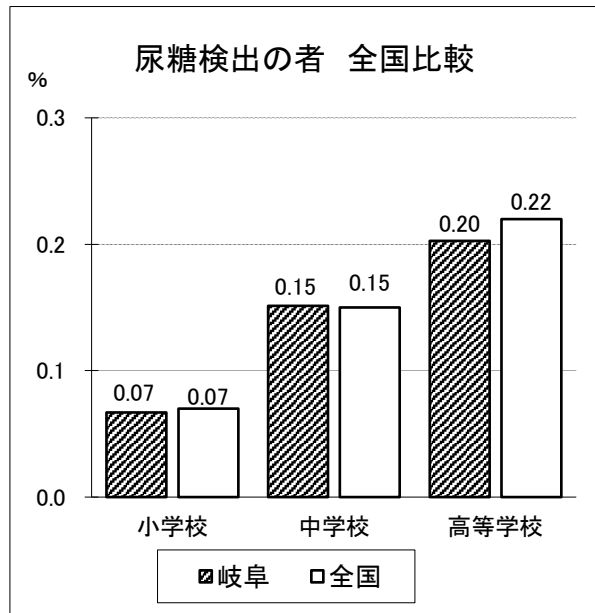
蛋白検出率は、小学校・中学校・高等学校すべての学校種において、全国平均より低い値を示した。



(10) 糖尿病

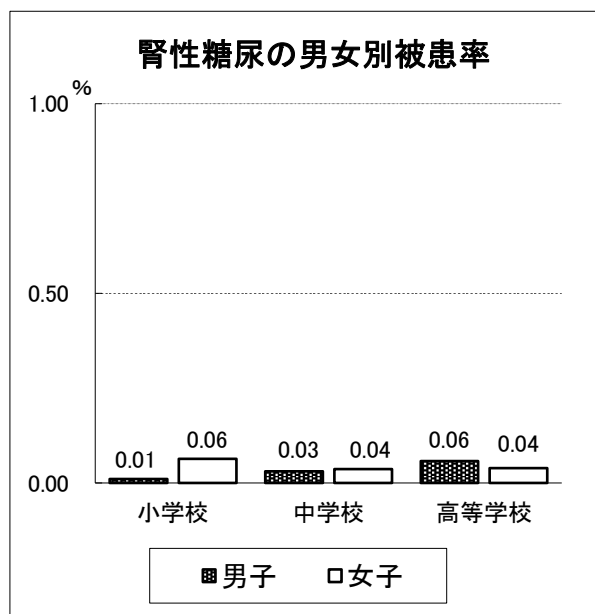
尿糖検出者：第一次検査の結果、尿中に糖が検出（陽性と判定）された者

中学校・高等学校と年齢が上がるごとに割合が高くなっている。全国平均と比較すると、ほぼ同様の結果となっている。



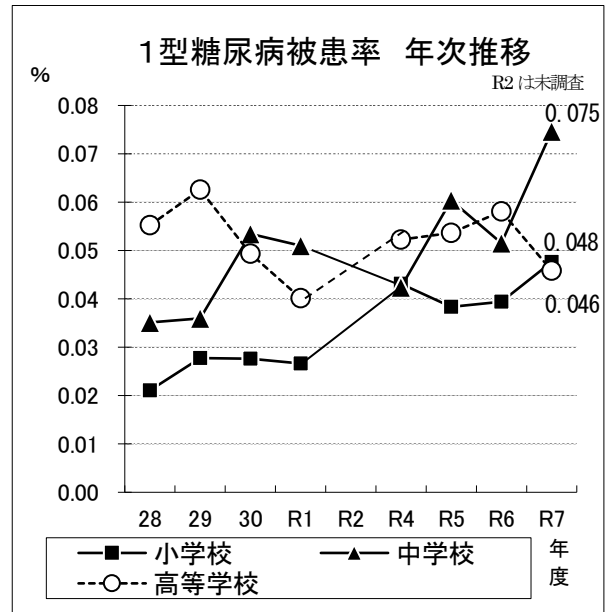
腎性糖尿：腎性糖尿と判定された者（過年度に判定された者も含む）

腎性糖尿は、小学校女子と高等学校男子の割合が高かった。判定された者は全員で68名であった。

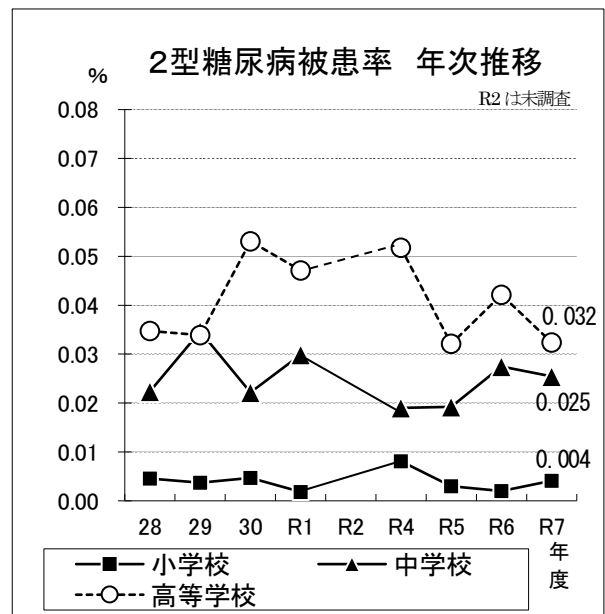


- 1型糖尿病：膵臓のインスリンを生産している細胞が破壊され、インスリン分泌が著しく低下して起こる病気
- 2型糖尿病：2型糖尿病になりやすい素因を持っている子供が、運動不足、過剰な食事やストレスが多い生活を続けていると発症しやすい病気

1型糖尿病被患率は、小学校、中学校において増加し、高等学校においては、減少した。



2型糖尿病被患率において中学校と高等学校は減少し、小学校は若干増加した。

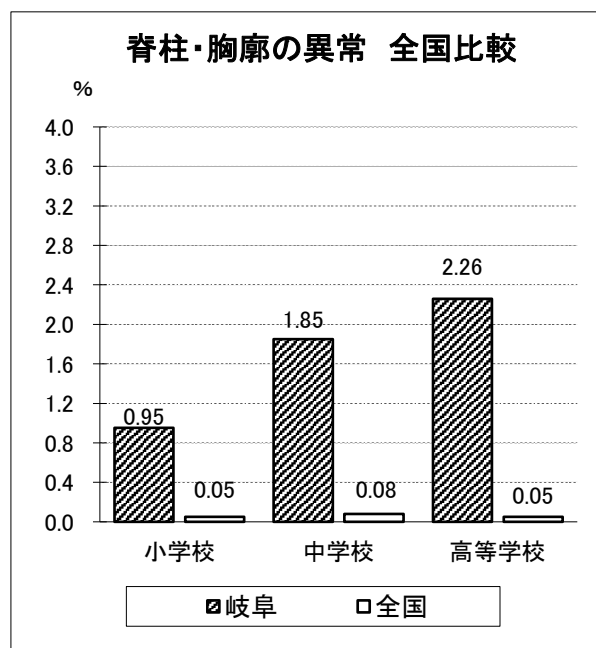
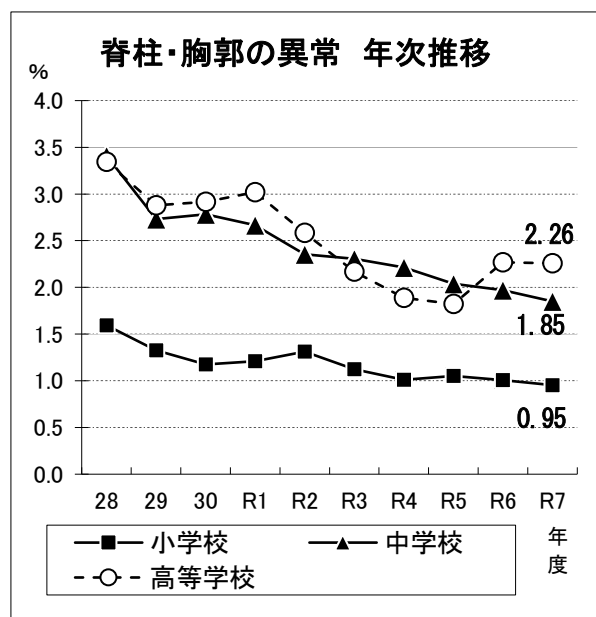


(11) 脊柱・胸郭・四肢の状態の異常

脊柱・胸郭・四肢の状態：脊柱、胸郭及び四肢の状態が異常と判定された者

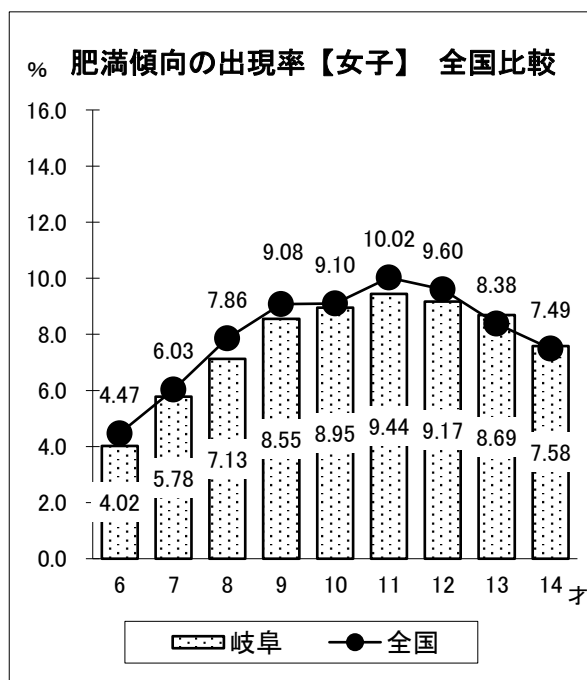
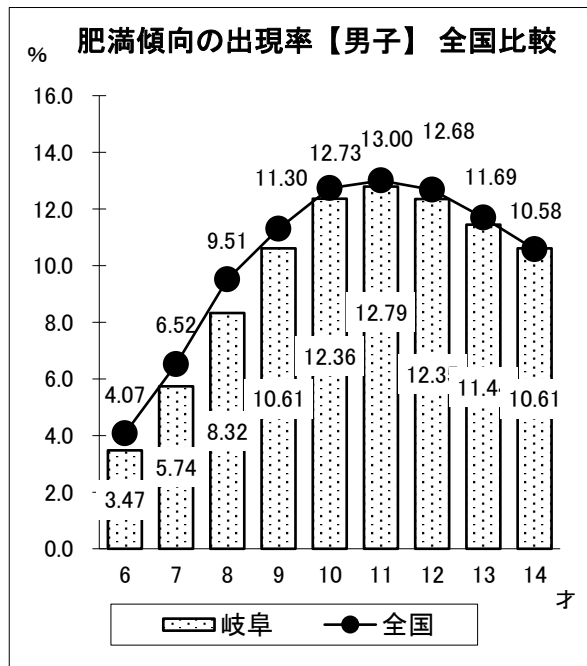
平成28年度より、健康診断の項目「四肢の状態」が必須項目に加わり、運動器検診が実施されている。

校種別では、中学校・高等学校の疾患率が高いが、減少傾向である。小学校の疾患率は低く、ゆるやかに減少している。全国平均と比較すると全ての学校種で、高い数値となっており、早期発見につながっている。



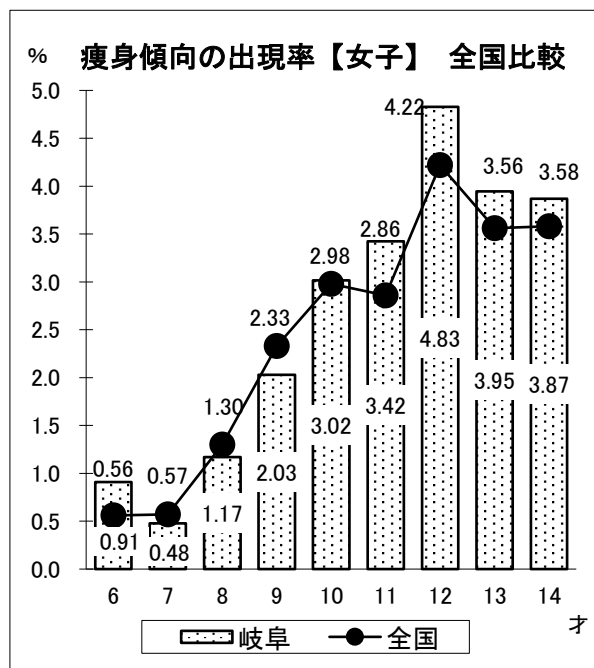
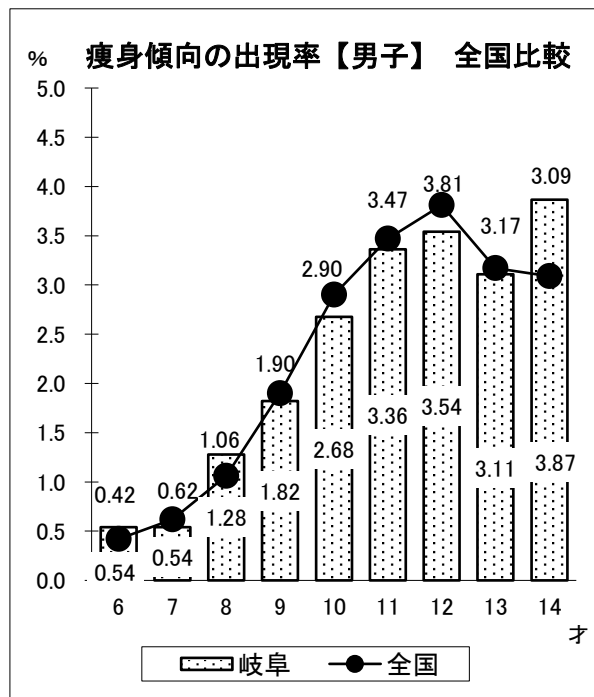
(12) 肥満傾向

男子は女子と比較し、肥満傾向の割合が全体的に高い。全国平均と比較すると、男女とも顕著な差はみられない。



(13) 痩身傾向

男女ともに、年齢が進むにつれて、痩身傾向の割合が高くなり、中学生においては、男女ともに全国平均を上回る高い傾向にある。



(14) 高等学校のBMI

BMI：成人の肥満並びに痩せの評価方法のひとつ
 $\text{BMI} = \frac{\text{体重 (kg)}}{(\text{身長 (m)})^2}$

高校生において BMI を指標として肥満及び痩身傾向を算出した。

男女ともに、BMI 18.5 未満の割合が 15 歳に高い傾向がある。BMI 25.0 以上の肥満傾向は、男子に多い。

